

# 中高ドイツ語に見られる語形の多様性

— 押韻技法の観点から縮約形を中心に —

武 市 修

## 0. はじめに

ヨーロッパ大陸におけるゲルマン民族のキリスト教化が進むにつれて、その文学はキリスト教の受容、普及を主要な目的とすることになる。また、フランク王国の分裂にともない次第にドイツという意識が形成されるとともに、ドイツ語で書かれる文学の中で、それまでの頭韻を用いた表現でなく、脚韻を踏む詩行が試みられる。その最初の作品が870年頃成立した、古高ドイツ語 (Ahd.) で書かれたオトフリト・フォン・ヴァイセンブルクの『総合福音書』*Evangelienbuch* である。彼はそれまでのラテン語で書かれたキリスト教の内容をドイツ語で、しかも、脚韻を踏んで表現するという困難な仕事に精力的に取り組んだ。彼は1タクトの男性韻と2タクトの女性韻を用いたが、それはカロリング時代の修道院文学によく見られる、ラテン語のレオ詩脚をもつヘクサメターの形式を基にしたものであった。これは初めての試みなので、その押韻技法にはまだ未熟なところもあった。それはひとつの長行を構成するふたつの短行の間に休止を置き、短行それぞれの最後を同じ母音で協和させるもので、*worahta:forahta* (I.1,80) や *missifiangin:missigiangin* (II.11,41) のように、稀に3音節、あるいは4音節の多音節押韻も見られるが、*liutin:datin* (IV.23,1) のように最後の音節だけが押韻し、それが変化語尾ということも稀ではない。<sup>1</sup>

時代が変わり騎士を文化の中心的な担い手とする中高ドイツ語 (Mhd.) で書かれた宮廷文学では、韻律を整え、押韻させることが必須条件となった。詩人たちはそれぞれ技巧を凝らした表現で詩行を満たし、行末を一定の条件に合わせて締めくくる。その韻律法は今日のそれと必ずしも一致せず、音節の強さだけでなく、時間の長さも意味があった。その詳細についてはここで述べる余裕はないが、ただ本稿で考察の対象とする宮廷叙事詩の詩行については、これから論を進めるに当たり、ごく大雑把に触れておかねばならない。

シュタウフェン古典期の宮廷叙事詩の基本形では1行に4つの強音があり、強音節と弱音節が原則として規則的に交替して現われる。行の始めには多くの場合、1音節(これがない場合から3音節まで幅がある)の Auftakt がある。そして行末のカデンツ(最後の主強音からあとの詩行の個所)が2行ずつ同じ母音で協和(押韻)しなければならない。

もちろん強音と弱音の交替が完全に守られるというわけではなく、時には強音と強音の間を満たす弱音が2つあるいは3つであったり、逆に弱音がなく強音が続けて現われたりするという場合もあり、そこには一定の許容範囲がある。

これに対し英雄叙事詩の中にはこのような短行ふたつ(前行と後行)でひとつの長行となり、4行を1節として語り進められるものもある。『ニーベルンゲンの歌』 *Nibelungenlied* はその代表的な例であり、A.ホイスラーによれば、その基本形はすべての前行に4つの強音があり、後行では1行目から3行目まではそれぞれ3つの強音があり、最後のタクトが休止し、4行目だけ4つ目の強音が満たされ、4揚音の完全な形をとっているというものである。<sup>2</sup>

ところで、中世の作品にはほとんどオリジナルが残っておらず、何世紀にもわたる間に筆写された幾種類もの写本を比較検討して、オリジナルに近いテキストを定めることが大きな仕事であり、編者の判断が求められる。本稿では詩人たちが韻律と押韻のためにいかに語形を工夫したか、またそれらの詩人たちの労作を伝える写本を基に、編者たちがいかにオリジナルに近い形を再構成するのに苦労したか、その工夫と苦労の跡を、シュタウフェン期の代表的叙事作品である『ニーベルンゲンの歌』、『イーヴァイン』 *Iwein*、『バルツイヴァール』 *Parzival*、および教訓詩『イタリアの客人』 *Der Wälsche Gast* の4作品について、sagen を中心に動詞の縮約形の用法の中にたどってみたい。<sup>3</sup>

## 1. 『ニーベルンゲンの歌』における sagen について

- (1) Dô sprach der künic Gunther: „dâ ist mir harte leit.  
 mir hât mîn vrouwe Prünhilt ein mære hie geseit,  
 du habes dich des gerüemet, daz du ir schœnen lîp  
 allerêrst habes geminnet, daz sagt Kriemhilt dîn wîp.“ (857,1-4)  
 そこでグンテル王は言った、「これは誠に遺憾なことだ。  
 わが妃ブリュンヒルトが訴えてきたのだが、  
 そなたはあれの美しい体を最初に愛したと自慢げに話したそうだな。

そなたの妃クリエムヒルトがそう言っておるということだ」。

(下線部は筆者による。以下同様)

上の例には動詞 *sagen* の変化形がふたつ見られる。2行目末の *geseit* は過去分詞 *gesaget* の縮約形で、1行目末の *leit* と押韻しており、どの主要写本でもこの形である。4行目の *sagt* はふつうの3人称単数現在形であるが、こちらはA、C写本では縮約形 *seit* となっている。『ニーベルンゲンの歌』については断片も含めて30以上の写本が発見されており、主としてA、B、C 3つの主要写本に基づいて編まれたテキストがそれぞれ刊行されている。今日ではその中で主にB写本に基づいたものが定本とされているが、しかしそれもすべてB写本どおりというわけではなく、編者の判断により適宜他の写本からも採り入れられている。そもそも作品冒頭の節からしてB写本に欠けているので、AとCから補って再構成されている。この主としてB写本に拠ったテキストでは *sagen* の縮約形は上例2行目のように、もっぱら過去分詞で現われ、完了13、受動39の合計52例で *geseit* はすべて行末にきて押韻している。

これに対し、縮約形でない *gesaget* は12例中4例が行末で、それ以外は行の中である。*gesaget* は1例のみ (2141, 4) 行末にきている。これらの用例を見ると、

- (2) Die drie künege wâren, als ich gesaget hân,  
 von vil hôhem ellen. in wâren undertân  
 ouch die besten recken, von den man hât gesaget,  
 starc und vil küene, in scarpfen strîten unverzaget. (8,1-4)  
 この3人の王はすでに私が話したように  
 ひじょうに勇氣に満ちあふれ、彼らにはこれまで人の噂に上った  
 もっとも勝れた勇士たち、力強きたいへん大胆で  
 激しい戦いにおいても怯むことのない勇士たちが付き従っていた。
- (3) diu mære, diu er brâhte, wurden niht verdaget  
 den wirt unt sîne friunde; ez wart in schiere gesaget. (1643,3f.)  
 彼がもたらしたこの話は城主とその親しい者たちに  
 隠されてはいなかった。彼らにすぐさまそのことが話された。
- (4) er dâhte: „du solt ez arnen; du gihest, ich sí verzagt.  
 du hâst dîniu mære ze hove ze lûte gesagt.“ (2141,3f.)  
 彼は思った。「お前に償いをしてもらおう。お前はわしが臆病者だと言う。」

お前はそんなことを宮廷で声高に言い過ぎた。」

例(2)の4行目の unverzaget は動詞 verzagen の過去分詞 verzaget に否定辞 un- が付いた分詞形容詞である。この作品では sagen 以外には -age- を語幹にもつ弱変化動詞 jagen, verzagen, verdagen, vrâgen 等には縮約形は用いられていないので、8,3 および 1643,4 は sagen の過去分詞も縮約形ではなく、本来の gesaget として、それぞれ unverzaget, verdaget と押韻している。

(4)の 2141,4 だけが gesaget でなく gesagt で、verzagt と押韻している。これは A, B 写本に従っているのもそれ自体問題はないが、C 写本では gesaget: verzaget である。また別のところ (2160,1) では B 写本でも verzaget となつて widersaget と押韻しており、末尾母音のない gesagt:verzagt はここだけである。したがって、ここも C 写本に拠り gesaget:verzaget とする方がテキスト全体として整合性があるだろう。gesaget:verzaget にしても、カデンツが次に示すように、1 音節の男性韻から 2 音節の gespaltene Hebung の男性韻に変わるだけで、韻律上問題はない。

du hâst dîniu mære      ze hove ze lûte gesagt. (2141,4)

× | ー | × × | ー | × ^ | | × | × ~ ~ | ー | × × | × ^ |

gesaget

× | ~ ~ ^ |

では、次の例はどうであろうか。

- (5) Mit gewalte niemen erwerben mac die maget“,  
sô sprach der künec Sigmunt, „daz ist mir wol gesaget. (57,1f.)  
誰も力づくでその乙女を手に入れることはできない」  
王ジグムントはこう言った。「わしは確かな筋からそう聞いている。

この箇所は A 写本では gesaget, B 写本では gesagt, C 写本では geseit であるが、我々のテキストも、A 写本に拠ったラハマン(K.Lachmann)も、さらには「C 写本に従った」と謳ったヘニヒ(U. Hennig)までも、そのテキストでここを gesaget としている。ところが、パールチュ(K.Bartsch), デ・ボーア(H.de Boor)に従ったブラッケルト(H. Brackert)はここを C 写本に拠り、1 行目の maget を meit に、2 行目の gesaget を geseit に改めている。ブラッケルトによるこの改変にはどういう意図があるのだろうか、それについて少し検討してみ

たい。

この個所の押韻相手である *maget* とその縮約形 *meit* の、B写本に基づいた我々のテキストにおける用法を調べてみると、*gesaget*、*geseit* についてとまったく同じ傾向が見られる。つまり *maget* が行末にきているのは、この個所を含めて27例中3例のみで、*gesaget*(57,1; 437,2) および *verdaget*(536,2) と押韻しているのに対し、*meit* は57例中56例が行末である。そして *geseit* とも1例だけであるが、70,1f. で押韻している。70,1f. は A, B, C 写本とも *meit:geseit* である。このことからブラケットは57,1f. を敢えてCに従い、*meit:geseit* としたのであろうし、それは適切な選択であった。しかしそれなら、437,1f. も同じように変えるべきであろう。437,1f. も上の3つのテキストとも *gesaget:maget* としているが、ここも *geseit:meit* の方が適当である。写本ではこの個所は A, C が *geseit:meit*、B が *gesaget:maget*: であり、どちらにしても(4)の例とは逆に、次のように *gesaget* であれば、カデンツは2音節の *gespaltene Hebung* の男性韻、*geseit* であれば1音節の男性韻となり、韻律、押韻とも問題はない。C写本に基づいた F. ツァルンケの版では、もちろんここは *meit:geseit* である。<sup>4</sup>

Der schilt was under buckeln, als uns daz ist gesaget, (437,1)

× | ×   × | × × | - | × ^ | | × | ×   × | ×   × | - ~ ^ |

geseit

× | × ^ |

ここで縮約形について確認しておく、有聲閉鎖子音 b, d, g はとくに Mhd. において母音の間にくるとよく消失し、それに伴って母音も変化した。Ahd. の -egi-, -igi- の組合せでは真ん中の -g- が硬口蓋音化して -j- となり、それに続く -i- と重なった結果、それぞれ -ei-, -i- となった。この縮約は Ahd. の -i- の前でのみ起こり、したがって -et を人称語尾とする *ir* に対する形では、原則として縮約形はない。この縮約は綴りとしては Ahd. ではまだ現われず、<sup>5</sup> 12世紀中頃から広がり始めた。<sup>6</sup> そして -egi-, -igi- が弱化した Mhd. の -ege-, -ige- を語幹にもつ動詞の縮約形は、押韻文学の中でリズムを整え、脚韻を踏むのに大いに利用されるようになった。

*sagen* は Ahd. の弱変化第3類に属する動詞であり、*du*, *er* の現在人称形は *sagest*, *saget* であって、本来 *sagen* には縮約形はない。ところが *tragen* などからの類推によって *sagen* が弱変化第1類の動詞として扱われ、*du*, *er* では人称語尾 -ist, -it が付き、幹母音がウムラウトを起こした *segist*, *segit* の形で

も、また過去分詞が *gisegit* の形でも用いられた。Mhd. での縮約形はこれらの形からのものであり、語幹 *-age-* が変化したものではない。しかし Mhd. で縮約形が一般に広がるにつれて、例えば、バイエルンでは *-age-* からの縮約形も用いられるようになり、<sup>7</sup> のちに見るように *jagen*, *verzagen*, *verdagen* などの弱変化動詞にも縮約形が用いられることがあった。

このように *sagen* で本来縮約形があり得るのは、『ニーベルンゲンの歌』では過去分詞と並んで 2 人称 *du* と 3 人称単数の現在形と過去形であるが、<sup>8</sup> しかし B 写本に基づいた我々のテキストには、それらに対してはあとで見る 1 例 (2334,1) 以外に縮約形が見られず、次のようにふつうの人称形であり、しかもそれらは 1 度も押韻に用いられていない。

- (6) *Si ilten harte balde, dâ der künec saz  
bî der küneginne. er sâget' in béiden dâz, (1408,1f.)*  
彼らは大急ぎで、王が妃とともにいる  
ところへ来た。王はそのふたりにその旨を話した。
- (7) *Dô gie der marcgrâve, dâ er die vrouwen vant,  
sîn wîp mit sîner tochter, und sâgete ín zehânt (1650,1f.)*  
そこで辺境伯は婦人たち、彼の妻と娘がいる  
ところへ行き、彼女たちにすぐさま話した

1650,2 の *sagete* は A 写本では *seite* と縮約形になっている。A 写本では過去分詞以外でも縮約形が多用され、B 写本の押韻以外の *saget*, *sagte* 等のところで 37 箇所縮約形になっている。C 写本ではそれがずっと少なく、6 箇所である。このことは写本成立の地域の違い、あるいは筆写生の出身地の違いの表われと考えられる。また同じ写本でも必ずしもひとりが書き写したとは言えず、例えば B 写本では少なくとも 3 人が分担しているようである。古い時代の作品の場合、このように写本だけでも複雑な関係があるので、テキスト・クリティクには一層の困難が伴うのである。

ところで、「～がいるところへ行った」という表現では、動詞はふつう(6)の例のように *sitzen* やあるいは *sîn* の過去形を用いるであろうが、Mhd. では(7)の例のように *vinden* の過去を用い、「～を見出だすところへ」という今日の語感からすると奇異に思われる表現がひじょうに多い。これも押韻のためであろう。また、1408,2 の *saget'* は過去で本来は *sagete* であるが、次の *in* と母音衝突(Hiat)

を起こすので、このような場合、ここのように韻律の上からアクセントのない末尾の *-e* が省かれる *Elision* という現象が見られる。しかし1650,2では逆にリズムの関係で *Hiat* を残している。

さて次にB写本で過去分詞以外に唯一現われる *sagen* の縮約形について見よう。

(8) *Waz söl ich gelöuben méré? mir séitez Hildebránt: (2334,1)*

今となっては何を信じればいいのか。ヒルデブラントはわしにこう申したぞ、

ここは他の個所とは反対にB写本のみ *seitez* で、Aは *sagt*, Cは *sagtez* であり、編者の判断でリズムの関係から *seitez* としており、韻律の上でもそれで問題はない。しかしながら、縮約形も可能な他のすべての個所ではふつうの人称形であるのに、この1個所だけ縮約形というのはいかにも奇異である。すべてB写本に従うという原則が貫徹されるのならそれも当然であろうが、しかしBに拠らずAやCに従っているところも少なくないし、<sup>9</sup> ここは *seitez* でなく *sagtez* でも韻律上もまったく同一なのだから、テキスト全体の整合性からすれば、C写本に拠り *sagtez* を採る方が適切であろう。

## 2. 『イーヴァイン』における *sagen* について

さて、次にハルトマン・フォン・アウエの『イーヴァイン』で *sagen* の縮約形がどのように用いられているか見てみよう。*-egi-* からの *-ei-* をもつ縮約形による押韻をアレマンの地で文学に採り入れたのはハルトマンである。<sup>10</sup> したがって、ここでも *sagen* は *du* と3人称単数主語に対する人称形、および過去分詞に縮約形が現われ、*ir* に対しては現われない。*sagen* はこの作品で全部で153度用いられ、そのうち縮約形の可能性のある過去分詞および *du* と *er*, *ez*, *si* に対する現在形と過去形は、前綴り *ge-* の付いた *gesagete* 1例(5693)を含め、合わせて55例ある。その中で過去分詞は35度現われるが、そのうち *geseit* は23例で完了13、受動10に用いられ、すべて行末で押韻している。*gesaget* も12例あり、そのうち1例のみ(4282)行中で、あとは行末にきている。『ニーベルンゲンの歌』に比べて *gesaget* による押韻が多いが、これはハルトマンが *maget* に縮約形を用いず、*maget:gesaget* で8例も韻を踏んでいるためで、それ以外には、縮約形をもたない *verdaget*(162), *gejaget*(2038), *unverzaget*(6566) が相手の3例だけである。

『イーヴァイン』には3人称単数主語に対する人称形で、次に示すように5度縮

約形が用いられている。

- (9) wan si verliesent beide ir arbeit,/dér dâ hœret und dér dâ seit.  
なぜなら話を聞く方もする方も、どちらの苦勞も無駄になるから。(255f.)
- (10) er missetuot, der dâz seit,/ez mache ir unstætekheit: (1873f.)  
彼女たちの移り気がそうさせる、と言う人は間違っている。
- (11) ern hât iu niht von im gelogen/dér iu tûgent vón im seit, (5832f.)  
その方の立派さについてあなたに話した人は、嘘を言ったのではありません。
- (12) ez hête dÛrch mich, seit sî mîr,/der rîter mittem lewen getân:  
(7752f.)  
獅子を連れたその騎士がそうしたのは、彼女が言うには、私のためだった。
- (13) daz în ein bôte seit/daz ezzen wære gereite. (6543f.)  
それで使いの者が彼らに、食事の用意ができたと言った。

これらの中で形は同じであるが、例(9)と(10)の seit は3人称単数現在、(11)と(12)の seit は過去である。後者の2例は sagete の縮約形 seite が、一方は押韻のため、他方は揚音と抑音の規則的交替を守るため、アクセントのない語末音 -e が省略されたのである。(12)の seit はこの作品のどの刊本もこの形を採っている。これはB写本に拠ったものであり、他の写本では、例えばAでは sagete、D、d、e では saget、Eとfでは sagt である。ハルトマンでは5つの叙事作品にこの縮約形が16度見られ、これ以外の15例ではすべて押韻に用いられているので、ここだけが語中に現われた特別な例である。これをB以外の写本に拠り sagte あるいは saget にすれば、揚音と抑音の規則的交替は崩れるが、しかしそれは次行の後半と同じく韻律上許容範囲で何ら問題はないし、むしろそうする方が詩人の用語、用法に合っているのではないだろうか。例えば saget にすれば、その部分は次のように gespaltene Hebung になるだろう。

ez hete durch mich, saget sî mir  
×|×××|× × |˘×|×˘|

我々の使用テキストの第7版とそれ以前の版のあいだに、ちょうどこれと同じような変更が見られる。

- (14) diu kûnegîn seit îm her wîder/Kâlogrêandes swære (890f.)
- (15) diu kûnegîn saget îm her wîder/Kâlogrenandes swære (890f.)

ベネッケ(G.F.Benecke)とラハマン(K.Lachmann)による校訂本の第6版までは(14)のように縮約形である。この seit im について編者は「ここは saget im でもよかった。なぜならハルトマンは künegin を 2 音節としても使っているから」<sup>11</sup>と注釈を付けている。ここで「2 音節として」というのは、このアクセントのある音節が開音の短い音節であるので gespaltene Hebung となり、2 音節でひとつの強音とみなされ、したがって 3 音節が韻律上 2 音節と等価ということである。

ここは写本では、A が sagetem, B, b は sagt im, D, a が sagete im, J, c, d が saget im であり、seit は14世紀、15世紀の p, r に拠っている。ヘンリツィ(E. Henrici)はすでに彼の刊本で sagte im としているが、ベネッケ・ラハマン本の改訂者ヴォルフ(Ludwig Wolff)は第7版で初めてこれを(15)のように saget im に改めた。先に考察した理由からここの改訂は適切であった。(12)の例も同様に改めるべきであろう。

縮約形でない人称形は、次の du に対する 1 例以外に 3 人称単数に対して13度あり、<sup>12</sup> そのうち 4 度だけ行末にきて押韻しており、押韻相手は verdaget:saget (839f.); verdagete:sagete (951f.); saget:maget (6575f.); verdagest:sagete (959f.)のように縮約形のない弱変化動詞の変化形と maget である。そしてそれ以外は行の中である。du に対する唯一の例と、押韻している 3 人称の例をひとつずつ示してみよう。ハルトマンも sagen の縮約形あるいは人称形を適宜押韻の手段として大いに活用したのである。

(16) und sich daz dûz wol verdagest./zewâre ób dûz íemen ságest,  
(959f.)

(17) diu allez guot gar verdaget/und níuwan daz állerbôeste ságet  
(839f.)

### 3. 『バルツィヴァール』における sagen について

ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハの『バルツィヴァール』は中世の作品の中では群を抜いて写本が多い。ラハマンはこれらを St.ガレン本Dの系列とミュンヘン本Gの系列に整理し、Dの系列をオリジナルに近いとした。ラハマンが1833年に初めて『バルツィヴァール』のテキストを編んだ時に利用したのは、8つの写本と9つの断片だけであった。その後多くの写本が発見され、今日では我々は17の完全写本と57の断片を持っている。<sup>13</sup> しかしながらそれらを総合して、衆目の一致

する定本を定めるのは至難の業であり、さまざまな努力にもかかわらず、未だ決定版を見るに至っていないのが実情である。そして大方の学問研究の基は相変わらずラハマン本であり、本稿で用いたテキストもこれに従った最新版である。この作品では *sagen* に関してはとくに縮約形と押韻とは関係がなく、人称形と過去分詞の普通の形が押韻にも用いられている。先ず、カデンツの異なるいくつかの例を紹介しよう。

- (18) Als uns diu âventiure saget,/dô het der helt unverzaget/ (12,3f.)  
 × | × × | ×× | ×× | 〰 ^ |
- (19) als mir diu âventiure sagt,/ dô nam der ritter und diu magt/  
 × | × × | | ×× | ×× | × ^ | (95,27f.)
- (20) Als mir d'âventiur sagete, / ir vederspil dâ jagete (400,1f.)  
 × × | × × | | 〰 | ×× | × ^ |
- (21) swie den knappen jâmer jagte,/den helden er doch sagte (105,11f.)  
 × × | × × | ×× | 〰 | × ^ || × | ×× | × × | 〰 | × ^ |
- (22) als man von sîner helfe saget,/ sît er an mir ist sus verzaget.  
 × | × × × | ×× | 〰 ^ | (10,29f.)

例(18),(19),(20)の最初の行はいずれも「原典の伝えるところによれば」という決まり切った表現であるが、押韻と韻律の関係で現在形と過去形になっている。(18)と(19)は現在形,<sup>14</sup> (20)は過去形である。しかし同じ3人称単数でも *saget* と *sagt*, *sagete* と *sagte* のように表記に統一性がない。韻律の面から見ると、タクトの満たし方の違いからリズムに変化が生じるが、どちらも規則からはずれるものではない。例えば、(18)と(19)を比べると、どちらも揚音と抑音が規則的に交替し最後の抑音が休止している。両者の違いは(18)ではカデンツが2音節の *gespaltene Hebung* の男性韻となっているのに対し、(19)では1音節の男性韻である点にある。また(20)と(21)の違いもカデンツにある。(20)では *sagete:jagete* と3音節の多重韻 (*erweiterter Reim*) であるのに対し、(21)では2音節の *klingend* である。

このような語形の違いがヴォルフラム自身によるものなのか、あるいは筆写生の綴り方の違いなのか定かではなく、したがって、テキスト・クリティクの場合どの語形を採用かは、編者によってかなりの異同がある。例えば例(20)の400,1ではパールチュやマルティンは *d'âventiure* と *-e* を付け、1音節のタクトを避けて、強弱の規則的交代に改めている。これに対し、ライツマンに基づく ATB シリーズ

のテキストでは融合形でなく、D写本に戻し、*diu âventiure* として3音節の *Auftakt* を置いている。

我々のテキストでは *saget* が *ir* に対する人称形3例と命令形6例、*ich* に対する過去形1例以外に3人称単数形が9度現われ、そのうち押韻しているのは例(18)の *unverzaget* と例(24)の *verzaget* を相手の2例だけである。*unverzaget* の語形を調べてみると、(18)を含めて2例のみで、その他の25例は *-e* のない *unverzagt* で、しかもそのうち24例が押韻している。また10,30の *verzaget* の形はこの個所しか用例がなく、他の15例ではやはり *-e* のない *verzagt* 形ですべて押韻している。一方 *sagt* は49個所中26個所が3人称単数で、そのうち例(19)に示したものを含め5個所、それ以外に主語 *ir* に対するもので2個所押韻している。これらのことから、(18)と(24)の例でも *saget* でなく *sagt* とする方が他の個所と整合性があるだろう。

過去分詞の縮約形はこの作品では皆無であり、*gesagt* が完了14、受動25の39個所中35度押韻している。*gesaget* は3例しかなく、2例押韻に用いられているが、これらについても少し検討してみたい。

23 von Bēnen der süezen maget /íme gezēlde wārt geságet, (713,21f.)

24 Gāwân al éine, ist mír geságt,/beleip aldâ, mit im diu magt.

(552,25f.)

25 doch ist sneller daz diu senewe jaget.

ob ích iu rēhte hân geságet, (241,11f.)

26 daz hân ich iu gesaget ê. (790,8)

× | ×   × | ×   ×|××|× ^ |

23では *maget:gesaget* の対韻だが、*maget* はこの作品で42度見られ、そのうち押韻個所はここと190,2(:*verklaget*) の2度しかない。*verklaget* も用例がその190,1の1個所のみである。これに対し *magt* は90例中44度行末で、そのうち19個所で例(24)のように *gesagt* と、1個所で例(19)のように *sagt* と、1個所で *versagt* (397,18) と韻を踏んでいる。*versagt* も3度行末に用いられ、*versaget* という形はない。また、25の例では *jaget:gesaget* の押韻だが、*jaget* は5例中ここのみが行末で、他の押韻個所では4度とも *jagt* である。

以上のことからこのテキストでは、23、25とも *magt:gesagt* および *jagt:gesagt* とした方が適切ではなからうか。ただし26の1例だけはリズムの関係から

gesaget の方がよい。

さて次に『バルツィヴァール』における sagen の縮約形について見てみよう。この形はきわめて少なく、4例が行の中に現われるのみで、先に述べたように過去分詞には皆無である。

27 ein mære will i'u niuwen,/daz séit von grôzen trîuwèn, (4,9f.)

28 dîu seit, sîn manlíchiu kráft

behieft den prîs in heidenschaft, (15,15f.)

29 si séit im fûrbaz mêrè (28,20)

30 der séite âlsus, ez wære ein strît (755,18)

最初のふたつの seit は3人称単数現在形、あとのふたつは過去形である。29の seit は本来は seite であるが、次の im と母音が連続するので弱音の語尾の -e が省かれている。これに対し30では韻律の関係でそれが残されている。例(6)と(7)で見たのと同じ現象である。これらの縮約形はふつうの人称形にしても、韻律上問題はなく、28の例では saget の方がよさそうである。これらの個所は編者によって採られた語形がさまざまであり、マルティンは4個所ともラハマンどおりであり、バルチュは755,18のみ縮約形を残している。しかしその理由は不明である。いっそライツマンのように、ここもふつうの人称形にした方が筋が通っているのではないだろうか。ライツマンはラハマンのテキストの縮約形を改め、sagen についてもすべて saget, sagete 形に統一している。しかし上で見たように、押韻の有無によって語形の区別がありそうなところもあり、ヴォルフラムの用語法の多様さも無視できずそれは極端であろう。いずれにしてもこの作品の原典批判のむずかしさを改めて思い知らされる。

#### 4. 『イタリアの客人』における sagen について

この教訓詩は北イタリアの都市貴族の一門の出であるトマジン・フォン・ツィルクラリアによって、アクィレリアの宮廷からドイツの騎士たちに向けて1216年頃書かれた。これはバイエルン・オーストリアから西に広がり、さらには東中部ドイツにまで読者（聴衆）の層を広げ、以後250年ほどのあいだ読まれ（朗読され）続けた。そのことは13世紀中頃から15世紀後半までの断片も含めて20種近くにおよぶ写本から見てとれる。これらの写本を比較考量して編まれたリュッケルト(H.Rückert)

の版ではテキスト・クリティクがかなり正確になされ、語形も比較的よく統一されているが、それを基にこの作品における *sagen* の縮約形を見ていこう。<sup>15</sup>

- ㊦) seit erz unde wirt ers inn,/er getrouet im immer min.  
dáz man tóugenlîchen seit,/daz wirt dicke ûz gebreit. (549-552)
- ㊧) der wol wesse daz erz niht enwære,  
seit man vór den hérrn als hínder ín. (14248f.)
- ㊨) wán man dicke gérne seit/des man sô genôte vreit. (543f.)
- ㊩) sô ist dáz wâr dáz man seit  
daz niemen wan im selben scheid: (5165f.)

例㊦)に *seit* が2度現われている。どちらも3人称単数現在 *saget* の縮約形で、一方は文頭に置かれて条件文の定動詞、他方は関係文の文末で *gebreit* と押韻している。㊧)の例は、人に煽てられてそれを真に受け、自分が偉いものかと思ひ込む多くの君主に忠告するところで、「そういう人は、もし人が君主たちの前でも彼らの陰で言うのと同じように言えば、自分がそんな大物ではないことが分かるだろうに」という意味で、*seit* は非現実の仮定文の文頭に置かれた接続法過去形の縮約形である。㊨)の *seit* は3人称単数現在形で、次行の *vreit* と韻を踏んでいる。この *vreit* は *vrâgen* の3人称単数現在 *vrâget* の縮約形である。

バイエルン・オーストリア方言では *-ege-*(>*ahd.-egi-*)だけでなく、*-age-*も *-ei* に縮約することがあった。<sup>16</sup> 同じ文化圏で生まれたと考えられている『ニーベルンゲンの歌』には見られなかったが、『イタリアの客人』では *sagen* と並んで *vrâgen*, *jagen* 等の弱変化動詞にも縮約形が用いられている。さらに *-ade-*を語幹に持つ動詞にも縮約形があり、㊩)の *scheid* がそうである。*schadet* の縮約形は本来 *schât* であるが、ここは *seit* と押韻するためこの形になっている。この作品には *schadet*, *schât*, *scheid* の3つの形が現われ、押韻にはもっぱら *scheid* が用いられ、1個所だけ次のように、複数形の縮約形が見られ、*entsagen* の複数過去の縮約形 *entsaiten* と韻を踏んでいる。

- ㊪) der entsait gôt vil gâr/der meineide wirt, daz ist wâr,/als ouch die zwêne entsaiten,/die niemen wan in selben scheiden.  
(11995-98)

外国人のこの詩人は韻を踏むためにさまざまな工夫を凝らしているのであるが、

この作品には *sagen* に 3 人称単数現在と過去形だけでなく、さらに *ich* に対する過去形にも縮約形が見られる。というよりも *ich* に対する過去形は 1 例 (*saget* 4331) を除きすべて縮約形であり、直説法、接続法を含め、*seite* が 3 例、語尾が省略された *seit* が 8 例ある。ただし 1 人称単数現在形は *sage* であり、また、*du* に対する形は命令形 1 例 (8879) 以外に見られない。次に *ich* に対するふたつの例を示してみよう。

06 *ich seite von der stætekeit, / dō ich von der unstæte seit, (9889f.)*  
 × | ×× | × × | ××|×^||×|× × |× × |××|×^ |

この例の *seite*, *seit* とも *sagete* の縮約形である。*seite* は揚音と抑音の規則的交替のため、語尾 *-e* が残っており、*seit* は押韻のためこの語尾が欠けたものである。また、この例では押韻が 3 音節にわたる多重韻である。

*saget*, *sagete* の代わりの縮約形は全部で *seit* が 54 例、*seite* が 5 例ある。*seit* 54 例中 32 度行末で押韻しているが、主語 *ich* に対する過去形の縮約形 8 例以外の残りの 46 例では、ほとんどが 3 人称単数主語に対する現在形である。これに対し *seite* は 5 度しかなく、いずれも行の中である。本来の人称形 *saget* は 4 例しかなく、その 4 例とも次の 07 のように 3 人称単数形で、これらは押韻に用いられていない。*sagt* 形は *ir* に対する命令形 1 例以外に 08 の 1 例のみである。これは写本 A, G では *ensaget:betraget* となっているので、ここも他の 4 箇所に合わせて *ensaget:betrâget* 形を採った方がよいかも知れない。

07 *Unmāze ist des Nīds vergift, / wān daz sāget ūns diu schrift,*  
 (9907f.)

08 *wan swēr mīn bōsheit nīht ensāgt/dā von daz ez in betrāgt,*  
 (1647f.)

過去分詞についても縮約形が圧倒的に多く、73 度の *geseit* の中で 51 度押韻し、そのうち 47 例が完了、4 例が受動文である。行中には完了 19 と受動 3 の 22 度現われている。縮約形でない形は *gesaget* 3 例、*gesagt* 1 例と極端に少ないが、最後にこの *gesagt* の 1 例を見てみよう。

69 diu schrift hât uns gesaget daz (12831)

× | ˘ × | ˘ × | ˘ | ˘ | ˘ |

ここは行末に強音が続き、この作品ではきわて稀な、いわゆる Strickerkadenz となっているが、これではリズムが悪く、他の個所との整合性もない。これも20の『パルツィヴァール』の例のように gesaget を採る方が、他の3個所と同じように揚音と抑音の規則的の交替が守れる。巻末の異本一覧には他の写本の表記が出ていないので、ほとんどの写本がこの形であるのかも知れないが、もし写本に異同があるのなら、これも他の例のように gesaget とする方がよいのではないだろうか。

ここで、これまで見てきた sagen の形を一覧表にして示してみよう(かっこ内の数字は押韻個所で内数)。

	NL	Iwein	Parz.	W.Gast
seit [e]	1(1)	4(3)+1(1)	3(0)+1(0)	54(32)+5(0) <sup>17</sup>
saget	4(0)	11(3)	9(2)	4(0)
sagete	18(0)	1(1)	11(4)	0
sagt	28(5)	1(0)	26(5)	1(1)
sagte	11(0)	1(0)	31(11)	0
gesaget	12(4)	12(11)	3(3)	3(2)
gesagt	1(1)	0	39(35)	1(0)
geseit	52(52)	23(23)	0	73(51)
sagest	0	1(1)	0	0

5. おわりに

一般にシュタウフェン古典主義と呼ばれる12世紀後期から13世紀前期にかけての頃には詩人たちは宮廷をめぐり、どの宮廷でも受け入れられるように用語、表現に意を用いた。その結果どの宮廷でも通用する共通語のようなものが成立していたと考えられている。しかし一口に中高ドイツ語といっても、地域により時代のずれにより違いがあるのは当然のことである。しかも詩人たちの作品がそのまま残っているのではなく、我々が手にしているテキストは、何世紀にもわたって筆写され続け

た複数の写本をもとに再構成されたものである。写本自体が時代を隔てて書き写されたものであるので、その綴り方はもとより、用語、表現法、統語法に異同があるのがふつうである。さらに、筆写生の個性もあり、必ずしも手本を忠実に写しているとはかぎらない。したがって、始めに言ったように、オリジナルにできるだけ近い形を再現することがきわめて困難かつ重要な仕事である。大方は原典批判を経ていわゆる定本とみなされるテキストが刊行されているが、このような観点から我々は古い文学作品を学問研究の対象にする場合、常にテキストに対して批判的な目をもたねばならない。そういう意味で、当時の押韻技法の一端を明らかにすることを目的とした本稿では、時に応じて写本の異同にまで言及した。その間の事情を少しでも明らかにできたとしたら幸いである。

### テキスト

*Das Nibelungenlied*. Nach dem Text von K. Bartsch und H. de Boor, ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von S. Grosse. Stuttgart 1997.

Hartmann von Aue: *Iwein*. Hrsg. von G.F. Benecke und K. Lachmann. Neu bearbeitet von Ludwig Wolff, 7. Ausgabe. Berlin 1968.

Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Mittelhochdeutscher Text nach der 6. Ausgabe von K. Lachmann, Übersetzung von P. Knecht, Einführung zum Text von Bernd Schirok. Berlin—New York 1998.

*Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria*. Herausgegeben von H. Rückert, mit einer Einleitung und Register von F. Neumann. Berlin 1965.

### 主要参考文献

*Das Nibelungenlied*. Herausgegeben von F. Zarncke; 6. Auflage. Leipzig 1887.

*Das Nibelungenlied*. Nach der Ausgabe von K. Bartsch, herausgegeben von H. de Boor; 20. Auflage. Wiesbaden 1972.

*Das Nibelungenlied nach der Handschrift C*. Herausgegeben von U. Hennig. Tübingen 1977(ATB 83).

*Das Nibelungenlied*. Paralleldruck der Handschriften A, B und C nebst Lesarten der übrigen Handschriften, herausgegeben von Michael Batts. Tübingen 1971.

F.H. Bäuml/E-M. Fallone: *A Concordance to the Nibelungenlied*

- (Bartsch-De Boor Text). Leeds 1976.
- Hartmann von Aue: *Iwein*. Text der 7. Ausgabe von G.F. Benecke, K. Lachmann u. L. Wolff, Übersetzung u. Anmerkungen von Th. Cramer. Berlin 1974.
- Hartmann von Aue: *Iwein*. Aus dem Mittelhochdeutschen übertragen, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von M. Wehrli. Zürich 1988.
- Hartmann von Aue: *Iwein Der Ritter mit dem Löwen*. Herausgegeben von E. Henrici, 2 Teile. Halle 1891 u. 1893.
- R.A. Boggs: *Hartmann von Aue Lemmatisierte Konkordanz zum Gesamtwerk*. Nendeln 1979 (Indices zur Deutschen Literatur 12/13).
- Wolfram's von Eschenbach Parzival und Titurel*. Herausgegeben von K. Bartsch. Leipzig 1875 (Deutsche Classiker des Mittelalters 9).
- Wolframs von Eschenbach Parzival und Titurel*. Herausgegeben von E. Martin, 2 Teile. Halle 1900 u. 1903.
- Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Herausgegeben von A. Leitzmann. 7. Auflage, revidiert von W. Deinert. Tübingen 1961-65 (ATB 12,13, 14).
- D. Kühn: *Der Parzival des Wolfram von Eschenbach*. 6. Auflage. Frankfurt a.M. 1992.
- C.D. Hall: *A complete Concordance to Wolfram von Eschenbach's Parzival*. New York & London 1990.
- Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 19. Auflage, bearbeitet von W. Mitzka, 2. Druck. Tübingen 1966.
- Hermann Paul: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 23. Auflage, neu bearbeitet von P. Wiehl und S. Grosse. Tübingen 1989.
- Werner Hoffmann: *Altdeutsche Metrik*. Stuttgart 1967.
- Otto Paul/Ingeborg Glier: *Deutsche Metrik*. 7. Auflage. München 1968.

## 注

- 1 Vgl. F. Kauffmann: *Deutsche Metrik nach ihrer geschichtlichen Entwicklung*. 3. Auflage. Marburg 1912, S.37f.
- 2 Vgl. Werner Hoffmann: *Altdeutsche Metrik*, S.9ff.
- 3 使用テキストは基本的には上記4つである。しかし折りにふれて他のテキスト

や写本にも言及することになる。

- 4 Vgl. Zarncke, S.67.
- 5 オトフリートの『総合福音書』にただ1個所だけ(O.I.11,33), それも異本の中にこのような縮約形が見られる。Nhd. legen に当たる Ahd. leggen に前綴り gi- のついた gileggen の接続法過去は gilegitī であるが, 別の写本 F に gileiti という形があるということである。Vgl. Paul Piper(Hrsg.): *Otfrids Evangelienbuch Mit Einleitung, erklärenden Anmerkungen, ausführlichem Glossar und einem Abriss der Grammatik*. Freiburg i.B.1887, II.Theil, S.253a.
- 6 Vgl. Paul/Wiehl/Grosse: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, § 107f.
- 7 Vgl. Ebd. § 108, Anm.2.
- 8 2人称複数およびそれから転用された敬称の2人称irに対しては, どの写本も人称形, 命令形ともすべて saget あるいは sagt である。
- 9 例えば ir に対する命令形の例を挙げてみよう。  
 si sprach: „nu saget, her Hagene, wer hât nâch iu gesant, (1787,1)  
 ここはB写本に nu saget がない。そのままでは韻律上流れが悪いので, 我々のテキストでは A, C に従ってこれを入れ, リズムを整えている。
- 10 Vgl. Paul/Wiehl/Grosse, § 107, Anm.3.
- 11 Hartmann von Aue: *Iwein*. Unveränderter Nachdruck der 5., von L. Wolff durchgesehenen Ausgabe. Berlin <sup>6</sup>1966, S.398.
- 12 それらは3人称単数に対して, 過去形 sagete 1例(952), sagte 1例(5404), saget 5例(890.1223.2613.3075.8026), 現在形 saget 6例(840.3052.4561.4861.5827.6575) がある。
- 13 Vgl. Einführung zum Text von Bernd Schirok in Wolframs *Parzival*, S.XXVI.
- 14 Knecht は 95,27 を現在完了に訳しているが, 他の訳者たちは現在にしている。決まりきった表現であるので, 現在にとる方がよいだろう。
- 15 この作品については重藤, 荻野の両氏が正確なコンコーダンスを作っておられる。それは未だ草稿の段階であるが, そのコピーをいただき, ここで利用させていただいた。ここに記してお礼を申しあげたい。
- 16 Vgl. Paul/Wiehl/Grosse, § 108 u. § 285.
- 17 紙面の関係で, seit の項の中に seite を入れた。+記号のあとの数字がその数である。

Reichtum an Wortformen des Mittelhochdeutschen  
— Kontrahierte Formen unter besonderer Berücksichtigung  
des Endreims —

Osamu TAKEICHI

In der mittelhochdeutschen gebundenen Literatur kommt es dem Dichter sehr darauf an, wie er die Metrik fließend darstellt und den Reim bildet. Dazu benutzt er verschiedene Mittel. Eines davon ist, kontrahierte Formen der Wörter geschickt einzusetzen. Im Mittelhochdeutschen findet man überall solche verkürzten Formen. In dieser Arbeit wird unter besonderer Berücksichtigung des Endreims kritisch untersucht, wie die Dichter solche kontrahierten Formen zum Reimen verwenden, und wie die Herausgeber der alten Dichtkunst bestrebt waren, kritische Ausgaben zu besorgen. Hier werden das Nibelungenlied, der Iwein Hartmanns von Aue, Wolframs Parzival und der Wälsche Gast von Thomasin von Zirclaria behandelt. Unser Hauptgegenstand ist das Verb *sagen*.

Im Nibelungenlied(Bartsch - de Boor Text) erscheint *sagen* in einer kontrahierten Form hauptsächlich im Partizip Präteritum, d.h.: *geseit*. Die Form ist insgesamt 52mal belegt, und zwar ohne Ausnahme im Reim am Versende. Die gewöhnliche Form *gesaget* finden wir dagegen 12mal, wovon sie viermal zum Reimen dient: mit *unverzaget*(8,3f.), *maget*(57,1f.;437,1f.), *verdaget*(1643,3f.). Die Form *maget* erscheint 27 mal, wovon nur dreimal gereimt wird, und zwar auf *gesaget*(57,1 und 437,2) und auf *verdaget*(536,2).

- 1) *Mit gewalte niemen erwerben mac die maget*,  
*sô sprach der künec Sigmunt, „daz ist mir wol gesaget.*  
(NL 57,1f.)

An dieser Stelle steht in der Handschrift A *gesaget*, in B *gesagt* und in C *geseit*. U. Hennig, die aufgrund der Handschrift C ihren Text (ATB) herausgegeben hat, wählt hier *maget:gesaget*, was mir unver-

ständig ist.

Die kontrahierte Form *meit* kommt von insgesamt 57 Belegstellen 56mal ans Versende. Sie reimt sich einmal auf *geseit* (70,1f.). Man kann einsehen, dass die Form *meit* in diesem Werk statt *maget* zum Reimen gebraucht wird. Man sollte also auch im Fall 57,1f. und 437,1f. *meit:geseit* setzen, wie an der Stelle 70,1f., wo es in allen drei Haupthandschriften A, B, C so steht. Mit *meit:geseit* würde dort auch metrisch kein Problem entstehen. Helmut Brackert, der auf dem Bartsch-de Boor Text fußt, hat in seiner Fassung an der Stelle 57,1f. statt *maget: gesaget* das kontrahierte Paar gesetzt, was mir ganz recht erscheint. Er hätte allerdings auch 437,1f. gleichfalls ändern sollen. Hier steht in den beiden Handschriften A und C *geseit:meit*. U.Hennig wählt unbegreiflicherweise auch hier *maget:gesaget*. Nur an der Stelle 536,1f. sollte *maget:verdaget* bleiben, weil dieses im Nibelungenlied nie kontrahiert erscheint.

Im Weine erscheint *sagen* in einer kontrahierten Form außer im Partizip in der dritten Person Singular fünfmal, worunter es nur einmal im Vers steht:

- 2) *ez hete durch mich, seit sī mir,/der rīter mīttem lewen getân.*  
(7752f.)

Dieses *seit* stammt aus der Handschrift B. In anderen Handschriften steht die normale Personalform. In allen fünf epischen Werken Hartmanns findet man *seit* [e] 16mal, und außer in dem oben genannten Beleg steht es am Versende. M.E. wäre es besser, wenn man hier statt *seit sagte* oder *saget* aus anderen Handschriften nehmen würde. Zwischen der 7. Ausgabe und den vorangegangenen Ausgaben gibt es ein Beispiel dieses Wechsels:

- 3) *diu künegin seit im her wider/Kâlogrêandes swære*  
(890f.: 6.Ausg.)  
*diu künegin saget im her wider / Kâlogrenandes swære*  
(890f.: 7.Ausg.)

Die eigentlichen Herausgeber merken an: „Es konnte auch *saget im* geschrieben werden: denn Hartmann sagt *künegin* auch zweisilbig.“ L. Wolff hat erst in der 7. Ausgabe diese Stelle verbessert, was mir richtig vorkommt. Emil Henrici hat schon in seiner Textausgabe *saget im* gesetzt.

Was den Parzival betrifft, so haben wir heute 17 vollständige Handschriften und 57 Fragmente, so dass es noch nicht reicht, eine zureichende kritische Ausgabe zu erstellen. Die wissenschaftliche Forschung beruht immer noch auf der Ausgabe Lachmanns, der dafür nur acht Handschriften und neun Bruchstücke verwendet. Für den Parzival gibt es viele textkritische Probleme.

In der Lachmann-Fassung kommt das Partizip Präteritum von *sagen* 39mal in der Form *gesagt* vor, und *gesagt* steht 35mal davon am Versende. *gesaget* findet man nur dreimal, und es reimt sich zweimal davon je auf *maget*(713,21f.) und auf *jaget*(241,11f.).

4) von *Bēnen der süezen maget/ime gezelde wart gesaget*, (713,21f.)

Nun erscheint *maget* im Reim nur zweimal (hier mit *gesaget* und an der Stelle 90,2 mit *verklaget*), während *magt* 44mal von 90 Belegen im Reim steht. *verklaget* ist nur hier belegt. *jaget* bildet nur hier von fünf Belegen den Reim, sonst steht *jagt* in vier Belegen am Versende. Aus diesen Gründen sollte man 713,21f. *magt:gesagt* und 241,11f. *jagt:gesagt* wählen. In der Lachmannschen Ausgabe findet man nur viermal die kontrahierte Form von *sagen* in der 3. Person Singular, und zwar ohne Reimbezug. Sonst gibt es keine verkürzte Form von *sagen*. A. Leitzmann hat in seiner Ausgabe (ATB) dieses *seit* [e] jeweils in die normale Personalform gewechselt.

Im Wälschen Gast, dessen Textausgabe von H. Rückert herausgegeben ist, findet man statt der normalen Personalform *saget* oder *sagete* die kontrahierte Form *seit* 54mal und *seite* 5mal. *seit* kommt 32mal von 54 Belegen am Versende vor, während *seite* alle fünfmal im Vers steht. Die Präteritalform für *ich* lautet hier sowohl im Indikativ wie im Konjunktiv meistens nicht *sagete* (nur einmal 4331

belegt), sondern *seite*(dreimal) oder *seit*(8mal, hiervon nur einmal im Reim). In den übrigen 46 Belegen von *seit* für die dritte Person ist es meistens im Präsens. Einige davon sind konjunktivisch (z.B.:14249). Das Part. Prät. von *sagen* erscheint in diesem Werk als *geseit*(51mal von 73 Belegen im Reim) weit häufiger denn als *gesaget*(dreimal) und *gesagt*(einmal). Die kontrahierte Form dient zum Reimen. In diesem Werk findet man um der Reime willen auch andere schwache Verben kontrahiert, z.B.: für *schaden*(:*scheit*), *vrâgen*(:*vreit*), *jagen*(:*jeit*). Im folgenden werden seltene Beispiele der pluralischen kontrahierten Formen gezeigt:

- 5) *der entseit got vil gar/der meineide wirt, daz ist wâr,/*  
*als ouch die zwêne entseiten,/die niemen wan in selben scheiten.*  
 (11995-98)

Die verkürzte Form von *schadet* und *geschadet* lautet eigentlich *schât* und *geschât*. Aber hier wird zum Reimen hauptsächlich *scheit*(5 von 7 Belegen) und *geseit*(alle 5 Belege) benutzt. Thomasin, der Ausländer war, hat sich sehr bemüht, Reime zu bilden.